
THE LOST AND DAMNED

sHid

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

THE LOST AND DAMNED

【Nコード】

N3499Z

【作者名】

SHid

【あらすじ】

第一部「THE LOST AND DAMNED」…のびハザ無理のないバイオ？より1年。生物兵器やウイルスに世界が徐々に犯されていく中、TOKYOのゴースト・タウンにいるという闇商人を自己満足の為に追う、大学生たち。しかし、ゴースト・タウンは想像以上に化け物に侵されていた…彼らは無事、平和だった日常に戻るのか！？

登場人物（前書き）

登場人物紹介です。本編及び、PROLOGUEは次かと…
時期は無理のないバイオ？から1年後という設定です

12月16日／ブルーシーを追加しました

登場人物

第一部 「THE LOST AND DAMND」登場人物

- 真島・ケント（通称、マーシー） -

主に彼の視点で繰り広げられる、「チーム・ザ・ロスト」という少年情報屋の一人…と自称している大学生
とりえは無いが努力と情熱と運は人一倍
今回、同期生であり相棒のスミスとタルとともに謎のウイルスが蔓延している東京のゴースト・タウンへ赴く

- 石川・スミヤ（通称、スミス） -

マーシーの親友であり、相棒、力持ちで巨漢
しかし、笑顔が絶やさず、いつもニコニコしている
今回、マーシーとタルとともに東京のゴースト・タウンに赴く

- 柊・タクト（通称、タル）

マーシーの親友であり、同じ学部であるクラスメイト
マーシーとは別のサークルに入ってるが何故かマーシーやスミスとともにゴーストタウン行きを志願した
多くを語らない性格であり、若干オタク気があるが、頭のよさはチーム一

ブルーシー

第1話に登場。

本名は明かされていない。「連帯保証人逆恨み殺人事件」にて、マーシーとともに解決したらしい

マーシーとスミスと共に、地獄の街を訪れるつもりだったが、遅刻した

代わりにタルが行くことになり、何かと運の良い男

- 包帯サングラスの男 -

謎の男、マーシー達が見ている共有動画サイトや2chなどでは「闇の商人」と言われている

マーシー達がゴースト・タウンに潜んでいるとのネットでの書き込みを見て追う事になるが…

顔をゲリラのように、包帯とサングラスで隠しており正体・素顔など、詳細は現在不明

- 14 aruru -

2chやツイッターにて包帯サングラスの男についてスレを立てたり、呟いたりしているネット住民

今回、包帯サングラスの男の居場所を真実か否か、特定したらしく、マーシー達がゴースト・タウンを訪れる原因になる

マーシーとは以前からコンタクトを取っており、ツイッターや電話、メールなどでマーシー達の協力をする

包帯サングラスの男と同じく、詳細は不明

- ドラえもん -

説明不要の大人気アニメキャラ、「のびハザ」では「頼れる？仲間」「黒幕」など、何でもこなす

今回の小説にも正式登場が予定されているおり、第一部では幕間・解説役

- 野比・のび太 -

「のびハザ」シリーズの主人公

色々、地獄を味わっており、一番の苦労人…無理のない？終了後、行方不明

ちなみに、この作品は無理のない？の2週目ENDから1年後の話である

タルとドラえもんが時折、幕間や本編にて語る

登場人物（後書き）

忙しくてなかなか、書けませんでした、ごめんなさい

まさか、所属する部活が全国大会に行くとは…

忙しさが増すので素直には喜べませんがねwww

PROLOGUE · LOST · S BOYS (前書き)

プロローグです

ちょっと、無駄に長いですwww
誤字脱字がありましたら、報告よろしくおねがいします

PROLOGUE - LOST'S BOYS

ドラえもん・のび太のバイオハザード 無理のないバイオ？から1年が過ぎた

あれから1年が過ぎて、アンブレラが崩壊しかけになろうとしても、ウイルスの脅威はとどまるところを知らず、現在も立ち入り制限や封鎖、核ミサイル処理などで除染は続いた。だが、それでも、ゾンビやB・O・Wが一向に減らずそれはおろか、アンブレラの過激派や闇商人、私設軍団の暗躍により、増加している傾向にあるようである

世界政府は混乱に備え、バイオハザードの危機を発令せず、黙認し出したが、マスコミや技術が進化したコンピューター、インターネットの進歩や、某大国が作った人工衛星により、結局、自分で公開しているようなものであり、一般市民の目にとどまって行くことになった

しかし、国民は平和を求め、政府管理区域（立ち入り制限区域）を避け、ひっそりと暮らしていくだけであった

…が、中には面白がつてネットで嘘八百やなりすましを書き込みをしている人達もいる…

その一人が真島・ケントという大学生と、その取り巻きであった…

ドラ「はい、みなさん、お久しぶりですね。ハイ。ばくドラえもんでございます。」

「今日はぼくが第一部の解説・幕間役ということで呼ばれました。よろしく。」

「無理のないバイオ？から1年後の世界…まだまだ、アンブレラは暗躍しているようで、しつこいしつこい。」

「のび太くんは現在、行方不明なんですけど…まあ、正確にはぼくたちも行方不明中なんですけどね（笑）。」

「のび太に変わって活躍するのは”マーシー”というあだ名の大学生たちが活躍してくれます！」

「みなさん、それから寒いですよ、（風）には注意してくださいね…（風邪）をひきますよ」

「…面白くないですか？コレ？…おもしろ…くない…そうですか、わかりました、もう本編に移ります。グスン。」

大学キャンパス内・コンピューター室

ここでは学生たちがインターネットを楽しむところである

そこへ一人の学生がさっそくネットを立ち上げて、とあるサイトを見ている

誰かを待っているようだ

マーシー「いった！14 a r u r u！オレだ！マーシーだ！」

彼は真島・ケント。仲間からは「マーシー」というあだ名で呼ばれ

ている

メディア・情報を専攻しており、普段はコンピューター室にいる彼は今、ツイッターをしており、2chやツイッターでは「情報神」と名が高い「14aruru」という住民と会話をしている

そこへ、1人の背が高く、ガッツリした男が入ってきたニコニコしながらマーシーに近付く

スミス「マ〜シ〜、何してんの？また、ヤバイサイトでも見てんの？」

彼は石川・スミヤ。マーシーの親友で、笑顔を絶やさない巨漢の男仲間からは「スミス」と呼ばれている、食い物に目がない人間科学を専攻している男である

この2人は怪しげなサークルを作っており、「チーム・ザ・ロスト」というバウンティハンターのな事をしている。むちゃくちゃなことばかりするので大学からの評判は悪い

マーシーはスミスに手を招き、サイトを見せる

スミスは「おお！」と言った後、マーシーの隣に座る

スミス「これは、ツイッターじゃないか？」

マーシー「ああ、今、情報屋仲間から大金を稼ぐ方法を探してもらってる。」

スミス「情報屋仲間って…いつからマーシーが情報屋になったんだ？」

マーシー「バカ！オレは情報通なんだから情報屋なんだよ！」

マーシーはパソコンに文字を打ちながら言う

スミスはケラケラ笑い、マーシーと同じように覗き込む

スミス「何を呟いてるんだ？」

マーシー「オレのネット上でのダチ、14aruruという奴と話し合ってたんだ、こいつはネット上では情報神と言われててな……」

スミス「じょうほうしん……じゅうよんアルル？」

スミスは目を離し、何かの紙をマーシーに見せる

マーシー「なんじゃいなこれ？」

スミス「それがさあ……有志数名と共同で前にやった……え……」

マーシー「連帯保証人逆恨み殺人事件の犯人をとっ捕まえて警察に売ったことだろ？」

スミス「ああ、どうやらそのことがバレっちまったみたいで懸賞金を学校に渡せ……だって。」

マーシーはいらついて紙を取り、びりびりに破いてゴミ箱に捨てた

マーシー「ざけんな池沼どもが。オレ達の金だろうがバカたれ。」

スミス「腹減ったな……そういえば、あのお金どうしたんだっけ？」

マーシー「ああ、確か、稼ぎ金が200万で、50万を有志に渡して、後の150万は山分けしたろ。」

スミス「え……？そうだっけ？」

マーシー「お前……聞いたところによると貯金もせず軍資金にもせず、飯代に使ったらしいじゃねえかバカ。」

スミスは笑う……スミスの眉が上がってるので照れかくしだろう

マーシー「まあ、いいや、経った今、情報が入ったぜ。14aruruからだ。」

スミス「どんな内容だ？」

マーシーはツイッターを見る

マーシー：そろそろ金欠になってきしまった、何か大金稼げる仕事ない？

14 aruru：ああ、あるよ。若干、危険だけどね。まあ、前の事件の活躍ようじゃ大丈夫だと思うけどwww

スミス「ワラだって。ってか、よく知ってるね。」

マーシー「ハハハ、もう、情報は入ってやがるのか…感心するぜ。」

マーシー：ありがとよ。じゃあ、内容をkwsk。

14 aruru：マーシーは闇商人って知ってるかい？

マーシー「闇商人…確か、2ちゃんねるでも見たことがあるな。」

スミス「ネットは危険なウイルス兵器をアンブレラと取引してるとか…」

マーシー「思い出したぜ…なるほどな、化け物商人がよ…」

マーシー：闇商人ってヤバいものをアンブレラと取引してるやつだろ？

14 aruru：ああ、世界政府が追ってる闇商人だ、包帯を顔に

巻いてサングラスを掛けてる奴だ

マーシー：そいつを…どうするんだ？まさか、捕まえるのか？

14 a r u r u：ピンポン！当たり前！

スミス「おいおい、結構な無理難題だな。」

マーシー「闇商人をとっ捕まえるには軍隊が必要だろう。」

マーシー：マジかよ…いくらなんでもそれは難しいだろ…

14 a r u r u：どうやら奴はT O K Y Oの政府管理区域にいるらしい、護衛もつけずにドリームフットビルに立て籠もっているらしい

マーシー：なるほどな…手取り金はどれくらいだ？

14 a r u r u：1兆円だ。

マーシーとスミスは飛び上った！1兆円の懸賞金がかけられているのか！さすがは闇商人だ！

14 a r u r u：必要なものはこっちで揃えよう、大体、3名必要だ

マーシー「三人か…オレとスミスと…」

スミスがマーシーの言葉を遮る

スミス「ちょっとちょっと！なんでオレも入ってるんだよ！」

マーシーはスミスの言葉を無視し、「あいつがいる。」と言った

マーシー：武器とかを用意してくれたらありがたいや。人数は揃った。

14 aruru：そうか、じゃあ、人数集めてE地下鉄駅前にバンが止まっているはずだからそのバンに乗せてもらえ

マーシー：分かった、ありがとよ。

マーシーはサイトを切った

スミス「3人つて…オレを入れてるのかよ。」

マーシー「当たり前だろ、もう一人は…ダチに頼もう。」

スミス「まあ、1兆円ついても…」

マーシーは頷き、紙に闇商人と殴り書きをして、ビリビリに破く

スミス「1兆円なんてホントに貰えるわけないよな。」

マーシー「ああ、でも、まあ、オレ達が世界中で有名になったらTV出演とかできて、御の字だな。」

スミス「そうだな…それにしても、ゴーストタウンか…危険すぎるな。」

マーシーはスミスの肩を叩く

マーシー「大丈夫だ、問題ない。ロストMCだ。」

スミス「はいはい、殺人犯の次は化け物があ…」

マーシーは誰かにメールを送っているようだ

マーシー「よっしゃ、行くぞ！」

スミス「誰にメールを送ったんだ？」

マーシーは「ダチだ。」と言った

マーシー「クラスメイトにの面白いオタクがいるんだ。そいつに頼

もう、行くぞ。」

マーシーはコンピューター室を出ようとする

スミス「クラスメイトねえ…名前は何？」

マーシーはコンピューター室が向こう側からカギがかけられている事に気付く

マーシー「あの、腐れハゲ！スミス！頼むわ。」

スミス「任せろ。」

スミスは踏ん張って行きを整え、ドアにショルダータックルをする

大きい打撃音とともに、ドアは吹き飛ぶ

マーシーは拍手をする

マーシー「ナイス！その力がある限り、オレ達は無敵だぜ！」

スミス「ありがとう。ところで、誰なんだ？」

マーシー「ああ、E地下鉄に行く前に会いに行こう。」

スミスは何かひねくれた顔になる…しかし、ニヤツいている顔は止めない

スミス「もう、考えているのか…」

マーシー「行くぞ！」

マーシーとスミスは大学キャンパスを飛び出す！

某、ライブ会場にて…

ここでは、とあるバンドがライブを開いていた

客たちは大声で熱狂している、中でヴォーカルが叫ぶ
声優「みんなありがとー！」

有名な女性声優がファンたちの為にライブを開いているようだ

「おおおー！ー！ー！ー！ー！」

「サイコーだよー！」

「こっち向いて〜」

そこにいたファンの一人が携帯を取り出し、メールを確認する
タル「…ん、そろそろか…」

彼はマーシーと同じクラスメイトである

柊・タクト。マーシーは（タル）と言っている

タルはツイッターを開いていた、とある、つぶやきを見る

一曲が終わったようだ

辺りはさらに、熱狂し出す

声優「ありがとうー！じゃあ、次は恒例の…」

声優は笑って、一問おき、ファンたちは一斉に声を上げる

ファン「Song For You……！」

スタッフが声優のいる横にラッキーパーソンと書かれた抽選箱を持つてくる

声優「はい！じゃあ、みなさんの持っているライターのところに番号が書かれてあります！私がボールを取りますので、ボールに書いてある番号と同じ番号の人はどうぞ、舞台上がってきてくださいー！」

ワーーーーーーー！！

一同は熱狂し、ライターをそれぞれ取る

声優「じゃあ、行きますよーラッキー。」

ファン「パーソン！」

ドラムロールが鳴り響くと同時に、タルはその場を立ち去ろうとする
ライターを隣にいた女性ファンに渡す

声優が抽選箱からボールを取る、133番と書いてある

声優「今回のラッキーパーソンは133番の方です！どこにおられますでしょうか！？」

女性「え、あの…」

タル「ここにいるぞ、この女の人だ。」

タルは叫ぶ、女性にピンライトが当たり、辺りは盛大な拍手で見舞われる

声優が女性に近付き、握手をする、そして、タルは出口に向かう
声優「おめでとうございま〜す！こちらの女の方がラッキーパースンでーす！」

女性の声優に連れられて、舞台の上に上がると、曲が流れだし、女性性は涙した

どうやら、一人を舞台の上にあげ、その人の為に曲を歌い、少しばかりシーンを体験できるというらしい

タルは外に出る

タル「…行くか…T O K Y Oのゴーストタウンへ…」

タルは歩き出した

マーシー「ん？空の様子が…」

スミス「何だ…紫に変わってきているな…」

タル「…何かの予兆か…？」

3人は変わりゆく空の色を見る…何か胸の中で踊り、あの、TVでみた人が人を食らう地獄が頭の中をよぎった

T O K Y O、ゴースト・タウン

アア~~~~~

ウウ~~~~~

キシヤ――――！！！！

地獄の街を頑丈な高層ビルの最上階から見下ろし。顔に包帯を巻き、サングラスを掛けた男が一人……

謎の男「…空の色が…」

謎の男「…地獄は…甘美なものだな…」

地獄は再び、幕を開けようとしていた

PROLOGUE - LOST - s Boys (後書き)

ドラ「またお会いしましたね、ドラえもんです。」

「さあ、いよいよ地獄が再び舞い降りようとしています。」

「そういえば、3・11の時も空の色が変でしたね…ふふふ。」

「彼らは好奇心旺盛なようです、そして、地獄は甘美という謎の男…さあ、どうなるでしょうか…」

「みなさんは、好奇心を持つのは良いですが…危険な事にだけは手を出さないようお願いします。ククク。」

「次回、第1話【地獄の街へ…】」

「またお会いしましょう。」

「…結構しんどいですね、この役…」

地獄の街へ（前書き）

池田大作【ソン・テチャク、自称、創価学会名誉会長www】が今、病気で死にかけのようです！やっただあ！！！！

大体、ネタはひらめきからなので、前話と矛盾があるものは訂正しました

第二話です。この小説、特に第一部ではパロディが多めです【ドラマ、映画など】

地獄の街へ

マーシーとスミスはE地下鉄前に到着し、スミスはコンビニに何かを買いに行つて、マーシーは待っていた

また、もう一人の仲間を待っていた、どうやらまだ、バンは到着していないようだ

マーシー「何やってんだあの、間抜けは…ブルーシーの奴…」

スミスがレジ袋にたくさんのお食べ物を持ってきた

スミス「はあ、買った買った！これで、当分、腹の方は大丈夫だ。」

マーシー「おいおい、旅行に行くんじゃないんだぜ？」

スミス「わかつてるけど、お腹が減ったら戦はできないからね。」

マーシーは頭をかく、やれやれ…と言ったところである

マーシー「ブルーシーの奴、こねえんだ！何やってんだ腰ぬけが！」

スミス「おそらく、逃げ出したんだろう。無理もないさ、化け物が

うごめく、あのTOKYOのゴースタウンへ行くんだからな。」

マーシーは堪忍袋が切れた、ブルーシーとは前の「連帯保証人逆恨み殺人事件」でともに事件を追った仲間だったが、さすがにおそれおののいたようだ

そこへ、マーシーとスミスの前に一台のバンがやってきた

バンが止まると一人のギャングっぽい男がニコニコしながら近づいてきた

男「14aruruさんから聞いてやってきました。マーシーさんとスミスさんですね？」

意外にも丁寧な口調で話しかけてきた

マーシー「ああ、そうだ。」

スミス「どうもっす！」

男「結構：ですが、もう一人の方は：？」

マーシーとスミスは目を合わせる

スミス「ええ：と。」

マーシー「ビビって現れねえ：もういいんだ、オレ達だけで行く。」

男は事務的に「そうですか。」とつぶやいた

男はスミスの方を向いて言った

男「お連れ様は：？スミスさんは大丈夫でしょうか。」

スミス「なんとかなるっしょ。」

スミスはうんうんうなづいた

マーシー「ああ、行こう。」

マーシーが言うと後ろから「待て！」と言う声が飛んできた

マーシーとスミスはギョッ！として振り向いた！

マーシー「お前は：タル？」

スミス「タル：タルか！」

終・タクトだった！彼もまた、先ほどの事件で2人と協力した一人だった

タルはマーシー達と同じく14 a r r u r uのツイッターのつぶやきを見て、ここに来たようだ

タル「水臭いじゃないか、僕を置いていくのか？」

スミス「手伝ってくれるなら嬉しいね。」

男「タルさんですね、話は聞いています。」

タル「ど：どうも。」

マーシーはタルの肩を叩いた

タルの顔が真っ赤になっていた、恥ずかしいんだろう

マーシー「バカなのはおたがいさまさ：さあ、行こう、オレ達のTV出演が待ってる。」

男は人数を数えると、口を開いた

男「では、マーシーさん、スミスさん、タルさんの3人でよろしいですね。」

マーシー「ああ。」

スミス「そうだねえ、そう思うしかないよね。」

タル「TV出演したら、ユリ・アドバンスに会いたいな……」

スミス「ユリ・アドバンス？ああ、ドイツ人の国民的アイドルか。」

マーシー「まあ、そんなことより！ユリのことよりも地獄の街へレッツゴーだ！」

マーシー達はバンに乗る

男はマーシー達3人を後部座席に乗せた、とゆうか、バンの内部はアニメに出てきそうな未来の車だった

マーシー「こいつは…何だこりや？銃がないぞ！銃が！」

バンの中には武器がたくさんあった…が、銃は見当たらなかった

男「さあ？私に聞かれましても…14aruruさんの指示で動いているもので…」

スミス「あんた誰だよ？」

スミスが問いかける

タル「…バック・トゥ・ザ・フューチャー？」

タルが呟く

男がニコニコしながら振り返る

その前にマーシーとスミスはタルの言葉に引つかかる

マーシー&スミス「バック・トゥ・ザ・フューチャー？」

それって…まさか！

男「行きますよ……！地獄の街へ！！」

男が叫ぶと、時空が歪み、凄まじい爆音がした！

3人「うわあああああああああああああああああああああああああああああ
あああ！」

3人は突然の出来事に対応しきれず、絶叫するだけだった

マーシー「Oh!Shit!映画じゃねえか！」

スミス「あああああああああああああああああああああ
あああああああああ！」

スミスは叫びっぱなしだ、それに引き換え、マーシーは罵声を出し、冷静なのはタルだ

タル「ジェ……ジェットコースター……なのか？」

男「ジェット・コースターではありません、私たちは今、遠く離れたゴーストタウンへ向かってるんです。」

「マーシー、完全にジェット・コースターじゃねえあ——」

スミス「アアアアアアアアアアアアアアアアアア
アアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア
アアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア
アアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア

タル「……すごい……」

男「いい忘れました、シートベルトを着用してください、後、数秒で車は時間の流れを突破し、一気にゴースト・タウンへ参ります。」

3人はいわれるがまま、シートベルトをする、というかそういうこととは先に言え

「マシー、14aruruの奴う！一体何者なんだあゝ！」

男「さあ！時間の空間を突破します！」

「マシー、OH! FUCK!」

絶叫にみまれ、男と3人と車は時間の空間へ消し飛び、瞬間移動をした

地獄の街への直行便は過激なものとなった。だが、3人は地獄の恐ろしさを知ることとなる……

ブルーシー「マーシーすまん！！遅れた！！」

一足遅れてブルーシーという男がやってきた……が……

ブルーシー「あれ?...マーシー達...どこに...」
ブルーシーという男は、別の意味では運が良かったのかもしれない
...

地獄の街へ（後書き）

ドラ「どうも、またお会いしましたね。」

「今回はついに、地獄の街に到着するマーシー達。のび太くん達が味わった地獄を彼らも味わう事になります…」

「そして、14aruruというネット住民…一体何者なんでしょうか？」

「バック・トウ・フューチャーのパロディがありました。が、作者はあまり映画を見たことがないので想像で…とのことです。」

「ブルーシーという男…かなり運が良いようで、作者そっくりです…」

「次回、『ゴースト・タウン』また、お会いしましょう。」

「地獄の街…それはみなさんが思っているほど、楽なものではありません…クッククク。」

ゴースト・タウン（前書き）

祝！！金正日総書記死亡！

ゴースト・タウン

マーシー「いてててて…」

マーシーは気がつく…バンの中だ
横にはスミスとタルがまだ、気を失っているようだ

男の姿が見当たらない…どこに行った…

サイドガラスから、外を見渡す…

………

辺りは殺伐としていた…地獄だ

ここが、どうやら、ゴースト・タウンのようだ

マーシー「…！」

想像以上だった…動画で見るとモノホンを見るのとは訳が違う…
皮膚がただれ、目玉は無く、ふらふらしている化け物…あれが…ゾンビ…？

マーシーはバンの後ろにあった金属バットを取る

マーシー「おい、起きろ、スミス、タル。」

スミスとタルを起こす

タル「む…マーシーか…」

タルが起きるが、スミスはぐーすか寝ている

タル「どうした？」

マーシー「ああ、ついたぞ、外を見ろ、ここが地獄だ。」

タルはサイドガラスから外を見る…

タル「…ここがT O K Y O か…TVで見るとは違うな…」

タルは顔色一つ変えず答える…

マーシー「…すまねえ。」

タル「何故、謝る？」

マーシー「だってよ…こんな…こんなところだとは思わなかった…」
タル「…」

マーシーは後悔した…まさか、こんな…地獄だとは思わなかった
なんて、TVは便利なんだろう…あの恐怖がまるで恐くなかったの
に…

タル「謝る暇があつたら…」

タルはマーシーの肩を叩く

マーシー「…」

タル「ドリーム・フットビルに向かうぞ…闇商人に会いに行こう…」
マーシー「…そうだな…済まねえ…」

タル「僕はただ…君についてきたただ…自分の意思でね…」

マーシー「…そうか…じゃあ行こう！」

マーシーは涙をぬぐい、タルに武器であるスコップを渡す

タルは笑う

タル「何だこの、ちんけな武器は…？」

マーシー「さあな、ふざけてんのかもな…」

マーシーは寝ているスミスを背負い、タルは持てるだけの接近武器
を持つて車を降りる

車を降りると、車はどこかへ消えさった

マーシー「なんだこりゃ？」

タル「…わからん。」

周りを見渡すと…そこにはうごめく化け物がうろついていた！

マーシー「どけ！」

近づいてくる化け物を金属バットで殴る

化け物は胴体から上が吹き飛んだ、意外にもろいようだ

マーシー「こつちもか！」

タルが投げナイフを化け物の眉間に投げる
眉間に突き刺さった化け物は「うっ！」と呻き声を上げた後、倒れて灰になった

一体二体倒した所で、ぞくぞくと増えていく

タル「数が多いな…ここに居る中で生者は僕たちだけだな…」

マーシー「そして、闇商人だな…」

タル「そうだな…こつちだ！」

マーシーとタルは鉄砲店と書かれている建物に入った

マーシー「おい！スミス！何時まで寝てんだてめえ！起きろ！」

マーシーはスミスを叩き起こす

スミス「うゝむゝ…おお！マーシーにタル！」

スミスは起きてマーシーとタルがいることを確認する

そして、辺りを見回す…

スミス「なんじゃこりゃあああああああー！…！銃
が一杯じゃないか！」

マーシー「まったく、どこでも寝られる奴だなお前は。感心するぞ。」

マーシーはため息をつく、タルは銃を調べているようだ

マーシー「ん…！！14aruruからメールが来てる！」

マーシーの携帯に14aruruからのメールが届いているようだ
しかし、一体どこからメールアドレスを調べたのやら…

14aruru【楽しんでくれたかい？時空旅行の旅は？君達は今、
知っているだろうがゴースト・タウンのど真ん中…まあ、元々アキ
バハラという地名の所に居る、武器は近接攻撃の物しかないのは勘
弁してくれ、ドリーム・フットビルは元々フジテレビがあったところ
にある。また連絡する、頑張ってくれ。】

マーシー「アキバハラ？…ああ、2chで見たところによるとオタクの聖地だったところか…」

スミス「フジテレビねえ…しかしもう、ゴーストタウンだからなあ…」

マーシー「まあ…そりゃあな…人間もいないとやっぱり町つてのは崩壊するんだな…」

スミス「うーん…でも、一様人間はいるんだけど…まあ、ゾンビとなっただけだね。」

マーシー「とにかく、返信するわ。」

マーシー【ありがとよ、クソみたいな体験だったぜ、オレ達がくたばる前に何か強力な銃とかワクチンとかよこしてくれよ、こんな状況じゃ命がいくつあっても足りねえよ。】

マーシー「よし、返信ボタンを…」

タル「ふう…」

スミス「大体はほとんどの地域でこんな状態だからなあ…僕らのところは特別だ。」

現状は他の所も立ち入り制限となっている、世界地図はどうなっているのやら

タル「ダメだな…」

タルが銃を眺めながら言う

マーシー「ダメか…」

タル「古いものばかりで使えるものはハンドガンくらい…」

タルはカウンターに三丁のハンドガンを置く

スミスがその一つを取る

スミス「グロック17じゃん。」

マーシー「グロックか…他はダメか？」

タル「ああ、古くて暴発して僕たちまで死ぬかも…」

突然ドアが開き、何匹かの犬とゾンビが入ってきた！

もちろん、犬はゾンビ犬だ！すばしっこくて、覇気を放っている

スミス「なんじゃありやあああああああああああああああああああああれがゾンビか！！？」

スミスが叫ぶ

マーシー「Oh！Shit！チクショウ！」

マーシーがゾンビ犬に抜けてグロックを連射する

タルはスコップでゾンビのはらわたを貫くとナイフで首を切りつけた
そして、スミスに鉄パイプのようなものを渡す

マーシー「こっちだ！」

マーシーがゾンビ犬を撃ち倒しながら言う、裏口のドアを蹴飛ばし、
先に進む

タル「…」

スミス「やべー！何だあいつら！？」

スミスが転げながら、後続き、タルもドアの前に立つ
生き残ったゾンビ犬が飛びかかってくる

タル「っし…」

ナイフで顔面を突き刺し、倒れたゾンビ犬を蹴飛ばす

タル「…」

手榴弾の安全ピンをはずし、店の中に放り込んでドアを閉めた

一瞬の閃光がした後、爆発が起きた

スミス「ああ。もったいない。」

タル「殺すんだから仕方がない、殺されて使えるわけがないからね
…」

スミス「何だいその名言クサイセリフ？オタクだけ？君には似合わ

ねーよ。」

マーシー「行くぞ！」

マーシーが叫ぶ、3人は地獄の街を歩きだす…

その頃…

ブルーシー「ちくしょう！携帯につながらねえ！ツイッターで呟くしかねえか！」

ブルーシーは一人、マーシー達の行方を心配していた

ゴースト・タウン（後書き）

ドラ「どうも、またまたお会いしましたね。」

「余談になりますが、第一部と第二部はあまり繋がらないかもしれませんが…いや、繋がりますがね（笑）」

「それにしても、北朝鮮の総書記、金正日が死んだようで、誠に2011年は激動でしたね。」

「ブルーシーという男は活躍しなさそうですが、終盤では…」

「あっ！次回は何回かに分けられていますので私は少しお休みします。」

「次回。【予定調和】、地獄のドリーム・フットビルの道中…険しそうですね…」

予定調和 ？（前書き）

演劇部の自主公演が終わってひと段落つきましたあゝ

遅れましたがみなさま、メリークリスマス！！！！

…ですが、狂った思想を持っているので嫌われ者のSHiDでした

W
W
W

予定調和？

ブルーシーの気まぐれ呟き！！

「ダチのマーシー達がいなくなって捜索中なう」

ブルーシー「みんなはどこへ行ったんだ…遅刻して怒ったのかな？」

ブルーシーはいなくなってしまったマーシー達を探していた

…といつても地下鉄前をうろろろしているだけであるが

ブルーシー「携帯にもつながらねえし…」

男「おい、ちょっとお前、ここで何をしてるんだ？」

ブルーシーは謎の男に声を掛けられる

ブルーシー「誰だ！？」

男は刑事のような服を着ている、警察官だろうか

刑事「オレは警官だ。ここでうろろろして何してんだ？」

ブルーシー「ダチを探してんだ。何か用か？」

刑事は頷き、手を招いた

刑事「まあこつち来てや。話があるから。」

ブルーシー「何言ってるんだお前？任意同行ならお断りだけど。」

ブルーシーがふと振り向く、周りに誰もいない…

刑事が拳銃を取り出した

ブルーシー「！？」

ドン！一発の銃声が飛び交った

マーシー「こつちにはゾンビがいらないぜ。」

スミス「本当か？」

マーシー「ああ、こつちだ。」

スミスはタルに話しかける

スミス「なあ、タル。どうしてこの街はこんなことになったんだっけ？」

タル「思い出すとすれば1年前の事件やR市のアンブレラ騒ぎ…あれが引き金になったんじゃないだろうか？」

タルはスマートフォンを取り出し、スミスにサイトを見せる

スミス「…うは。」

タル「TVで見たことあるだろう…闇商人については詳しくは知らないけど…」

スミス「ソースはネットかあ…」

スミスは悩む

タル「…そういうな…天安門事件って知ってるだろ…」

スミス「…だね。」

タルは別のサイトを開く…2ちゃんねるだ

タル「どうやら、のび太とかいう中学生くらいの子と仲間たち…そして、ロボットが活躍したらしいが…」

スミス「ほお…ん…」

スミスはタルを凝視する

タル「…何だ？」

スミス「あんた無口キャラじゃなかったっけ？」

タル「…違うな…」

スミス「なるほどな…」

スミスはゾンビを持ち上げて壁に叩きつける

スミス「のび太って子かあ…しっかりしてるなあ…」

マーシー「待て…何だあいつ…」

マーシーが前に指をさす…そこにはイノシシが血を垂らしながら待ち構えていた

予定調和 ? (後書き)

ここから、少し視点がブルーシーになったりマーシー達になったりします

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3499z/>

THE LOST AND DAMNED

2011年12月27日22時46分発行